



1. ITER 遠隔実験センター第2回技術会合の開催

9月17～19日にスペインのバルセロナの Fusion For Energy (幅広いアプローチ活動の欧州実施機関) 本部で ITER 遠隔実験センターの第2回技術会合が開催された(図1参照)。今回は日本実施機関側から12名(内6名はテレビ会議で出席)、欧州実施機関側から6名、それに IFERC とサテライトトカマクの各事業長、さらに ITER 機構から制御システム(CODAC)を開発している専門家3名も参加した。会合では、2013～2017年のスケジュールを再確認するとともに、施設・設備、ネットワーク、高速データ転送、遠隔実験システムソフト、実験データ解析ソフト、データ記憶装置、シミュレーター等の各タスクの進捗状況について議論し、新たに締結するソフトウェア開発の調達取り決めの内容について概ね合意に到った。また、ITER の CODAC システムの進捗状況と将来の取り扱い等について情報を交換し、協議した。六ヶ所の国際核融合エネルギー研究センターのソフトウェアの開発は2014年から始まり、遠隔実験設備の整備は2015年頃からの予定になる。

2. 第11回核融合技術国際シンポジウムの開催

9月16～20日、スペインのバルセロナで第11回核融合技術国際シンポジウムが開催された。このシンポジウムは核融合に関する科学、工学、実験施設、解析、設計、安全性等を中心として短期的、長期的な核融合技術の研究開発に焦点を当てていて、今回スペインのエネルギー・環境・科学技術研究センター(CIEMAT)とカタロニアエネルギー研究所(IREC)が主催して開催された。シンポジウムでは参加登録者は815人、525件の発表があった(図2参照)。今回のシンポジウムでは「Fusion Road Map Panel」というパネルディスカッションがあり、ITER の建設に加えて原型炉に向けた研究が主要テーマとして位置付けられた。

なお、本シンポジウムにて、国際核融合エネルギー研究センターの増殖機能材料開発グループで研究をしている



図1 第2回 ITER 遠隔実験センター技術会合(9月19日バルセロナ Fusion For Energy 本部にて)。

星野毅研究副主幹が、見事に若手の優れた研究発表に与えられる Miya-Abdou Award を単独受賞した(図3参照)。

3. 日本原子力学会2013年秋の大会の見学会が行われる

9月3～5日に八戸工業大学で開催されていた日本原子力学会2013年秋の大会の見学会の一環として、日本原燃のサイクル施設と原子力機構の国際核融合エネルギー研究センターの見学が9月6日に行われ40名が参加した。

当日は快晴の下、日本原燃のサイクル施設を見学後国際核融合エネルギー研究センターに入り、昼食、概要説明後、2班に分かれ、計算機・遠隔実験棟、原型炉 R&D 棟および IFMIF/EVEDA 開発試験棟を見学した。各施設では、それぞれの研究開発について説明を受け、高性能計算機や原型炉に関する研究開発について活発な質疑があった。

(日本原子力研究開発機構核融合研究開発部門)



図2 第11回核融合技術国際シンポジウム(9月18日バルセロナにて、ここここで議論が交わされているポスターセッション会場)。

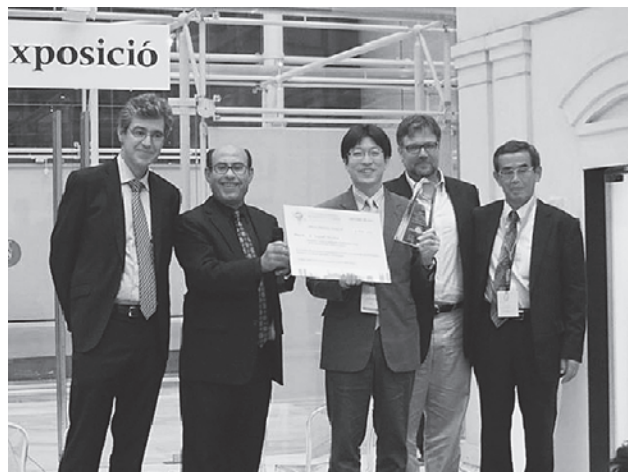


図3 Miya-Abdou Award を受賞した星野毅研究副主幹(9月19日バルセロナで開催された第11回核融合技術国際シンポジウムのバンケットにて)。